

なにわ

人物誌



名筆・佐々木志頭磨(二)

地域史研究者
三善貞司

震える手で、筆の動くままに書く独自の筆致を確立

風変りな天才書家佐々木志頭磨は、大変な凝り性でした。

京都の東山区茶屋町に、「方広寺」というお寺がありますね。地震で倒れたこの寺の大仏殿を豊臣秀頼が修復したおり、大きな釣鐘に「国家安康 君臣豊楽」との銘を入れたため、徳川家康から「家康の名前を引き裂くと、豊臣家が楽になるとはなにことじゃ。わしを呪い殺すつもりか」とむちゃないがかりをつけられ、豊臣氏が滅亡するきっかけになった事件で有名な、あのお寺です。

あるとき志頭磨は方広寺の住職から、「下馬」(神社の境内では神仏を敬うため馬から下りるとの意味。ふつうは立札)の2文字を書いてほしいと頼まれます。ところが一年経っても、二年経っても、書いてくれない。

とうとうしびれをきらした寺僧たちが志頭磨の自宅におしかけ、仰天しました。大きなくずかごが二つあって、一つには、「下」の字ばかり、もう一つには「馬」の字だけ書いた木切れが、山のように積まれています。

「1字ずつならやつと書けたが、2字つなぐとまだ納得がいかぬ」

とさえる志頭磨を押しつけて、寺僧たちはいかげんにくずかごから「下」と「馬」の木片を1枚ずつ奪いとって寺に持ち帰り、ひっつけて下馬札を立てたところ、その見事なこと、たちまち評判になって見物衆がおしかけ、京や大坂の書家たちも鑑賞に訪れ、誰もがため息をついて動かなかつたと伝えます。

こんな話もあります。加賀百万石の殿様前田侯が旗号(旗じるし)に用いる「左」「右」の2文字を注文しました。半年もかかってやっと気に入った字が書け届けますが、消費した紙が2千枚だったと資料に出ています。紙の価格が今よりはるかに高い時代です。

もちろんこれらは誇張した作り話でしょうが、前回述べたように修業時代彼は、師匠の藤木敦直あつなおから、毎日漢字一字を百回も書かせられ、敦直が納得する字がひとつもないときは、絶食させられたほどの猛勉強を課せられています。この努力が志頭磨流書道の基本になっっていることは確かです。

そんな彼も、あるときひどいスランプになりました。手がふるえて字が書けなくなっただけです。医師や薬師くすりしに診てもらっても、「なんでやる。わけがわからん」とさじを投げられます。神仏に祈ってもなんの霊験もない。さすがの彼もすっかり落ちこんで、ある日、淀川の堤防に寝込んでいました。

ふと見ると牛がよだれを垂らしながら、むしゃむしゃ草を食べているのが目に入ります。だからだとさがってくるよだれ・・・はっとして志頭磨ははね起きました。

「そうや。手がふるえるなら、ふるえる文字を書けばええんやないか」

彼は飛んで帰り、ふるえる文字を書いてとびあがります。今まで見たこともない、自分でもほれぼれするような見事な字が、紙の上におどつていたのです。

それからの彼はもつとふるえるように、筆をとるときはかならず酒を飲み、陶然（とうぜん）酔いが廻（まわ）ってうっとりした気分になること）となつてから、一気に書きあげたと伝えます。本当かどうかは知りませんが、面白い話ですね。

「字は自然に筆の動くままに書くものだ。巧く書こうと企てるのが一番いけない」
これは師匠敦直の口ぐせでした。

晩年の志頭磨は入門者たちに、

「よいか。漢字は絵文字といつて世界でも珍しい意味を持つ字じゃ。雨が田に降りだすと雷が鳴る。その心を形象（観念の具体化）するのが書じゃ」

と教えています。本当にそうですね。

元禄8年（1695）8月、76歳で死亡。墓は南浜墓地（北区豊崎1丁目）にあり、

「佐々木志頭磨専林先生墓」

と刻まれています。墓石の周りに弟子の川鶴梅溪（ばいけい）が、師を惜しむ長い漢文の碑銘を記しています。その中に、

「先生は陶淵明のような人柄で、多くの人たちから慕われた」

との意味の一節があります。陶淵明（とうえんめい）（陶潜）は、夏目漱石がもつとも尊敬した中国の漢詩人ですが、なかなかの愛酒家でした。

志頭磨の字がごらんになりたいのなら、住吉大社（住吉区住吉2丁目）をお勧めします。

あそこには俗に「名筆燈籠」と呼ばれる多くの石燈籠があり、それぞれの時代を代表する書家や文人の文字が刻まれています。その中で、「志頭磨燈籠」は「西広場」にあり、「住吉太神宮拝前 敬上永代常夜燈 貞享元甲子年仲夏吉辰」

と刻まれています。若いころ賀茂神社の神苑で竹ぼうきをふり回し、砂の上に字を書いては消し、消しては書いていたすらしただけあり、肉太の力強い文字です。次回で紹介する中国の書家趙陶齋（たうさい）は、「この燈籠にびっくりにして、」

「日本にもこれほどの能書家があったのか」

と叫んだとの話が、『浪華詩話』という古書に出ています。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

（株）ファッションビジネス・御堂筋新聞